死の脅威（存在脅威）の管理に解釈レベルが与える影響

○伊藤言¹・高野陽太郎¹・篠原優¹

(¹ 東京大学大学院人文社会系研究科)

キーワード：存在脅威管理理論、解釈レベル、死の顕現性

The effect of level of construal on terror management.

Gen ITO¹, Yohtaro TAKANO¹ and Yasashi SHINOHARA¹

(¹The University of Tokyo Graduate School of Humanities and Sociology)

Key Words: terror management theory, construal level, mortality salience

目 的

人は実存的な死の脅威を文化的世界観と自尊心によって緩衝しているため、死が顕現化(mortality salience: MS)したとき、文化的世界観を防衛する反応が生じる、と存在脅威管理理論(Terror Management Theory: TMT)は仮定する(Rosenblatt et al., 1989)。従来の研究は、あらかじめ自尊心を高めたり、文化的世界観や親しい人との関係性について想起させておくと、それらがバッファとして働き、死の脅威を顕現化させても(MS処理)、防衛反応が生じなくなることを示してきた。しかし、それらバッファを活性化させなくても、死の脅威を管理する方略があるのではないかと考えた。

Ledgerwood et al. (2010)は、状況をどのように解釈するかという解釈レベルをプライミング手法を用いて操作し、あらかじめ具体的な解釈レベルをプライムされた参加者は後続する別課題にて他者の説得の影響を受けやすくなるが、抽象的な解釈レベルをプライムされた参加者は他者の説得の影響を受けにくくなることを示した。そこで本研究では、解釈レベルは、説得の受容に対してだけではなく、死の脅威の管理にも影響を与えるのではないかと考えた。すなわち、具体的な解釈レベルをプライムされた群はMS処理後に防衛反応を示すが、抽象的な解釈レベルをプライムされた群はMS処理後に防衛反応を示さないと仮説を立てた。その際、MS処理の前ではなく、MS処理の後に解釈レベルをプライムし、MSに対する防衛反応が生じなくなるか検討を行った。これは、現実の世界では、たとえばテロ事件や大震災のように、突発的な死の脅威が生じた後にこそ脅威を管理する方略を求められる事態が通例だからである。

方 法

参加者 駿河台大学の学生54名(実験者の指示に従わなかった3名、外国人留学生3名、回答の半分以上が欠損値であった1名を分析から除外し、有効参加者数47名、そのうち男性25名、女性22名、平均年齢20.4歳)

手続き 心理学の授業の冒頭に質問紙を用いて集団実験で行われた。参加者は死の顕現性2(MS vs. 統制)×解釈レベル2(抽象プライミング vs. 具体プライミング)の4条件にランダムに割り当てられた。実験順序は、ディセプション、MS処理、解釈レベルの操作、文化的世界観の防衛度合いの測定だった。

MS処理に関しては、先行研究と同様に、MS条件の参加者は死に関する、統制条件の参加者はテレビ鑑賞に関する5分間のエッセイ記述を行った。この操作のあと、顕在的な感情を測定するために、参加者は日本語版PANASに回答した。解釈レベルの操作に関しては、先行研究と同様に、40個の単語リストから、抽象プライミング群は40個の抽象カテゴリー語を、具体プライミング群は40個の具体語を生成した(たとえば、「電車」というリスト単語に対し、抽象群は「のりもの」、具体群は「山手線」などの単語を生成)。

続いて、別の質問紙にて、二人の外国人留学生によって書

かれたとされる二つのエッセイ(日本に好意的 or 批判的)を読み、文章と著者の評価(正しい、よく書けている、好感持てる、賢い、知識ある、社会でうまくやれる)を7件法で行った後、デブリーフィングがなされ、実験は終了した。

結 果

先行研究と同様、文化的世界観(日本)に好意的なエッセイに対する評価から批判的なエッセイに対する評価を差し引いて6で割った得点を文化的世界観防衛得点とした(ニュートラル:0点、防衛高:7点~防衛低:-7点)。この得点について、好意的・批判的なエッセイどちらを先に呈示したかをダミー変数として共変量に投入した2×2の共分散分析を行ったところ、死の顕現性と解釈レベルの交互作用のみが有意となった($F(1, 42) = 4.16, p = .048, \eta^2 = .08$)。単純主効果の検定を行ったところ、具体プライミング群では先行研究と同様に統制群よりもMS処理群の方が有意に文化的世界観防衛得点が高かったものの($F(1, 42) = 5.66, p = .022, \eta^2 = .12$)、抽象プライミング群では仮説通り統制群とMS群の文化的世界観防衛得点に有意な差は認められなかった($F(1, 42) = .27, n.s.$)。この結果をFigure 1に示した。

Figure 1 MSと解釈レベルが文化的世界観防衛に与える影響
考 察

具体的な解釈レベルをプライムされた群はMS処理後に防衛反応を示すが、抽象的な解釈レベルをプライムされた群はMS処理後に防衛反応を示さないと仮説が支持された。では、なぜ抽象的な解釈レベルがMS処理後の防衛反応を抑制したのか。抽象的な解釈レベルは自己制御を高める(Fujita et al., 2006)からという説明がまず可能だろう。しかし、TMTとの関連で、さらなる些細な検討が必要である。

引用文献

- Fujita, K., Trope, Y., Liberman, N., & Levin-Sagi, M. (2006). Construal levels and self-control. *JPSP*, 90, 351-367.
Ledgerwood, A., Trope, Y., & Chaiken, S. (2010). Flexibility now, consistency later. *JPSP*, 99, 32-51.
Rosenblatt, A., Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., & Lyon, D. (1989). Evidence for terror management theory: I. *JPSP*, 57, 681-690.